
俺と童女と聖杯戦争

For152th-715

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と童女と聖杯戦争

【Nコード】

N5656Y

【作者名】

For152th-715

【あらすじ】

なかなかのダメ人間が、ありがちな神様の手違いで型月の世界に転生して巻き起こす騒動記。
オリキャラ無双、独自解釈・設定、原作魔改造を含みます。

プロローグ（前書き）

本作は作者の妄想と怨念と暗い目的でマミった もとい、塗れた
かなりヤバめの二次創作です。

とかく酷い内容なので、頭痛が痛い状態になる可能性が十分ありま
す。

皆様のご健康というか精神衛生のため、気分を害したらすぐに読む
のを止めて下さい。

万が一ご気分を害した場合は、コメント等で暴言を吐くと症状が改
善する可能性があります。

ご自由にお使ください。

プロローグ

気づけばそこは、ただっ広い真っ白な世界だった。
えらく殺風景なこの空間で俺が何をしているかと言えば

「ごめんなさいっ！ 本っ当にごめんなさい！！」

と、平身低頭で謝られていたりする。

理解不能な事態だ。何故、どうしてこんな状況になったのやら、
全く理解が出来ない。

道で躓いてコケたと思ったらトラックが突っ込んで来て、気づいたらこの空間に飛ばされていて、唐突に現れた自称・神様に「貴方が死ぬ予定はなかった」「こちらの手違い」などと言われ、そして今現在はその自称・神様に平伏で謝られている、と。

あ、駄目だ。回想してみたけどワケわかんないわ。

「あの、えつとですね、そんな謝らなくて大丈夫ですよ…？」

初対面の人物に、いきなりこうも平謝りに平謝られると気まずいことこの上ない。

ので、とりあえずこの妙に低姿勢の自称・神様をなだめる事を試みる。

と言うか、もっと詳細な状況説明をしてくれ。

「え…状況説明ですか？」

「まあ、正直事情が分からないのもっと詳しく解説してくれると…
…って、え？」

あれ？ 俺いま何か喋ったっけ？

「あ、いえ。私、これでも神ですので、思考を読むくらいは簡単なんですよ？」

……マジですか？

「マジ、です」

凄いな、流石は神様。

て……いや、待て。ということは、今までもこれから俺の思考はダダ漏れなのか！？

「大丈夫ですよ？ いくら神でもプライバシーへの配慮くらいはしますから」

「……いや、既に完璧に思考読んでんじゃん」

あはははは、と目を逸らす自称・神様。

この人（？） 本当に大丈夫なんだろうか？

「まあ、とにかく。ここは何処で何がどうしてこの状況に？」

「色々と説明しにくいんですが……。そうですね、まずはこの場所は死後の世界的なアレです。で、貴方は死にました」

え……？ なん……だと……？

「俺が、死んでる？」

その途方もない事実には俺の頭の中は真っ白に

「いや、貴方内心ではそれ受け入れてるじゃないですか。そんな驚いたフリしないでくださいよ」

なったりはしない。

この自称・神様の言う通りだ。俺は今、妙に落ち着いた気分で自分が死んだこととか、目の前にいるのが神様だとか、その他諸々の超常現象を受け入れている。

とは言え、やっぱりこう…絵面的に驚くところだろ、ここは。

「まあ、確かにそうやって驚いてくれると、こっちとしては説明しがいがあつて嬉しいですが……」

「じゃあ別にいいじゃん。ほら、続き続き」

「あの、貴方は私が神様だつて分かつてるんですよ？ もう少し敬意払うとか…？」

だって、なんか妙に人間臭くて敬意とかちよつと……。

まあ別にいいじゃん。ほら、続き続き。

「面倒だからつて思考で返事されると流石に悲しいですよお…」

「……まあ別にいいじゃん。ほら、続き続き」

「うう…。あの、それですね、貴方が死んだのはこちらの手違いでして、つまり貴方はあそこで死ぬはずの人間じゃなかったんです」

「はあ、なるほど」

「いや、『なるほど』って……。これ、そこまで軽い話じゃないですよ？ 本当に大丈夫ですか？」

問題なく分かってる。理解もしてる。そしてなんか既視感がある。

「でも、一度死んだ人間を生き返らせるのは無理なんです。どうやっても、どうしたって、神であっても。」

本当にごめんなさい。私は、取り返しのつかないことをしてしまいました」

「……………」

深々と頭を下げてくれる神様。その真摯な姿勢からは、ひしひしと誠意が伝わってくる。

くる、のだが……。なんだろう、この既視感？

「それで、その、代わりとも言えないんですが、貴方をお好きな」

「好きな世界に転生させてあげます、とか？」

「!?!」

ああ、なるほど。この展開、いつぞやネットで読んだ小説の展開にそっくりだったのか。どうりで納得の既視感。

いや、それにしてもこの神様、俺の思考が読めるんならそんな驚かなくても良いのに。

「違いますよお。まさか、私の渾身のお詫びが人間の小説と同程度

の発想だったなんて…」

あー。なるほど、そっちなか。

確かに神様にしては貧相な発想力な気がする。

「ひ、貧相とまで…。わたし、神様なのに…。

と、とりあえずどうですか、この提案？」

「うーん。まあ確かに魅力的と言えば魅力的かもしれない」

漫画やらアニメやらラノベの世界に入り込む、というのは男なら一度は想像したことがあるはずだ。

かく言う俺も、大いに身に覚えがあるので、少なからず心踊る部分がある。

「でしようでしょう！ それですなえ、貴方にご用意したのは、なんと型月の世界です！」

おお、それはなかなかグッドなチョイスだ。

Zero読んでEXTRAプレイしてあとはwiki読んだからの知識しかないけど、月姫・Fate・空の境界の世界に入り込めるとなると、否が応でも期待が高まるのは良いとして、

「なんで神様が型月とかいう俗語知ってるの？」

「それは、このために貴方の記録を漁って嗜好やらなにやらまで全部チェックしましたから。貴方が知っていることで、私が知らないこととかあり得ません。まあそれに、ちょっと本気出せばわりと全知全能なので、私」

それは凄い。凄いんだが……

「……おい、俺のプライベートはどこ行った？」

いやもう嗜好まで丸バレとか、程度によっては悶死するレベルだわ。

まさか俺のストライクなキャラとかまで知られてないよな？

「さて、それでは早速、行ってみましょうか！」

いや、完璧に話逸らしてるだろう。というか、その微妙な間で明らかにアウトだ。

「……総合神様連合八、お客様ノぶらばしーニ配慮シタ個人情報管理体制ヲ敷イテオリ」

「いやもうそういうのは良いから。いい加減にしろ」

この神様（暫定）にこれ以上付き合っていると、頭痛がしてきそう

だ。さっさと話を進めて欲しい。

「あ、良いんですか？ じゃ、話進めますねー」

……また思考読んでやがる。しかも反省ゼロだろ、この神様（仮定）は。

「えっと、貴方のために型月世界での容れ物を用意しました。詳細はさておき、性別は男。あ、あと飛ばされる時間はおおよそ第四次聖杯戦争の十年前となっています」

「ふーん。で、その容れ物とやらの詳細は？」

「まあバツチリ用意してますけどお…。どうです？ 最初からネタバレされるより、自分で自分の力を探り当てていく、つてのが燃えませんか？」

「う……」

鋭いところを突くな、この神様（暫定）。俺の趣味をよく把握してやがる。

でも、事前知識なく行くのも不安だしな……。

「心配しなくても大丈夫です。あなたの趣味は完璧に読みきって、完全にご満足いただける世界をご用意しました！」

確かに、この神様（暫定）の読心能力はかなりのものだし、それなら心配はいらない気もする。

「よし、じゃあそれで頼む」

「はい！ では、1名様ご案内です！」

突如、ガタン、と足元から音がした。

「は？」

間抜けに声を出して下を見ると、ぽっかり黒い穴が空いていた。

「い、いきなりですかぁーッ!？」

そうして、叫びながら落ちていく俺は、

「Yes! Yes! Yes!」

と叫び返す神様（断じて認められない）を見て激しく後悔しながら、暗闇へと意識を手放していった。

プロローグ（後書き）

作者「プロローグというかありがちなテンプレなので、本編開始はまだ先です」

作者「さらに言うと、次話になってもまだ『意味のある』小説にはなりません」

???「え、そんなのつまんない」

???「ねえねえ、出番はまだかしら？」

作者「つまらなくていい……わけじゃないけど、待って下さい。それと、君達の出番はずっと先です」

???「……え」

0 ・ 始まりの記憶（前書き）

1話でなく0話、内容的にはプロローグその2です。
よって、未だ本編は開始しません。

0 . 始まりの記憶

目覚めた場所、そこは赤い世界だった。

赤い。赤い。赤い。

真っ赤に燃え上がる空と、真っ赤に染まった地面。

何があつたのかは分からない。

何かが起きて、何かが来て、何かがこれをやつたのだということ
は理解していた。

隠れなければ、と本能が告げている。

隠れなければ死ぬ。隠れてもきつと死ぬ。

もしかすると、どうやつたつて違いなど無いのかもかもしれない。

それでも死にたくはないので、じつと息を潜めて物陰から赤い世
界を見つめている。

けれど、終わりはすぐにやつて来た。

赤い火の向こうから、赤い衣を纏つたソレは現れた。

火などなんでもないように泰然と歩くソレは、近くに隠れていた

××をあつさり斬り殺して、黒く乾きかけていた地面を、再び赤
で染めた。

隠れるとか逃げるとか、そんな発想が浮かぶ余地すら無い。

燃え盛る焔に浮かび上がる鷹のような目に捉えられたその瞬間、

あつさりと自分の死を受け入れさせられた。

×××××× 彼に狙われたのなら、自分なんかに生き延びよう
は無い。

妙に間延びした時間の中で、何時か何処かで見知った顔を見つめながら終わりを待つ。

炎の照り返しに鈍く光る刃が一对。あれならば、この命も速やかに摘み取られるだろう。

何故とかどうかと、そんな事すら問う猶予もない。この二度目の生は、こうして開幕と共に幕を下ろす定めだったのだと、疑問も憤りもなくそう受け入れた。

そうして。一際鋭い煌きを残し、翻った剣が身体を裂いた。痛みを感じる余地すら無く、吹き飛ばされて熱い地面を転がっていく。

傷が灼けるのか、炎が身体を焦がすのか。身を包む熱の意味すら分からず、ただ倒れ伏す。

これで最期か、という諦観に、身体の力が自然と抜けていく。しかし、霞んだ目はやがて焦点を結び、いつの間にか自分を見下ろしている彼と、幾つもの肉塊を斬り捨ててなお寸分の曇りもない一对の剣を映していた。

「『世界』め……。成る程、今回の掃除はここまでと^{仕事}いうことが誰に聞かせるでもなく呟かれた言葉は、けれど何故か自分には確と届いている。

だが、揺らめく火影と、視界を流れる奇妙な光、それらに掻き消されて彼の表情は窺えない。

「私が殺せなかったということは、君はここを生き残る事が^{必要}な

のだらうな。

いや、むしろ君のためにこの場の人間の命は奪わなければならなかった、というところか」

祝福のように、呪いのように。静かに紡がれるその独白は、ゆっくりとこの身体に染み入っていく。

「君と私は違う。だが、『世界』の操り人形であることに変わりはあるまい」

刹那、光が途切れて彼の顔が露になる。その顔は嘲るように、憤るように、酷く苦々しく歪んでいた。

同時に、とす、と驚くほどにあざざりとした音を立て、冷たい何かが落ちてきた。

吐き気を催すような冷気が、心臓の上に蟠る。わたがま

そして、目に写る景色が、霞むように消えていく。

ああ、この目がついに用を為さなくなったのか。

いや、違う。消えているのは彼の方だ。

現れた時と同じく、彼は溶けるように消えていく。誰の目にも止まらず、誰の記憶にも残らずに。

「生きる。君の命が誰の手に在ろうと、生を願うその意思は君だけの物だ」

最後にそれだけを言い捨てて、彼は何処かへと帰っていった。

誰かがいた痕跡も、何かがあった記録も、こうして思い返す記憶すら薄れていく。

彼 ×××××という存在を完全に忘れ却り《わすれさり》な

がらも、ただ一つ、「生きる」という最後の言葉が残響している。

胸に突き立つ冷たい温度と、緩慢に打つ心臓の音と、暗い世界に渦巻く光の流れを感じながら、”俺”は今度こそ意識を手放した。

0 ・ 始まりの記憶（後書き）

??? 「少々扱いが酷くないかね？」

作者 「不幸な人の言葉に貸してやる耳はありません。ここで出番作
つてやっただけでも有り難く思ってください」

???・??? 「ねえねえ、出番」

作者 「まだまだよ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5656y/>

俺と童女と聖杯戦争

2011年11月18日04時13分発行